【研究目的・研究計画】

台湾の漢字は繁体字である。日本でいう旧字体を用いている。繁体字を使用している台湾の日本語学習者は、日本語を使用する場合には新字体を使用する必要がある。しかし、台湾からの留学生を見ていると、新字体が書けない学生が多い。これは、台湾の留学生に限ったことではなく、明治大学の留学生の大半を占める中国大陸からの学生や韓国の学生においても同様である。彼らの板書を見ると、書き順はめちゃくちゃである。またその字形もその字を表しているとは思えない状況である。

これは、日本への留学の要件である日本語能力試験がマークシートであり、筆記を求めていないからであり、またパソコンやスマホでの漢字変換が可能であり、手書きの必要性がないからである。しかし、日常の生活、特に役所の書類などでは手書きが求められおり、新字体を学ぶ必要があると思われる。

現在ではほぼ非漢字圏である韓国、また簡体字を使用する中国大陸、そして繁体字を使用する台湾と、それぞれ環境が異なっており、それらを一括することはできない。そこで、まずは日本の戦前の漢字状況に近い台湾を研究対象とした。台湾で新字体を学ぶ学習者は、いわば戦前に旧字体を学んだ人たちが、戦後になって国語政策によって、新字体を学ぶ状況によく似ていると思われる。

当初は、5 月 6 日に日本を出発して、ちょうど台湾の大学暦における学年末における学習状態や指導方法を見学する予定でいた。それらの参考にして、夏休み中にアンケートを作成して、新年度になってから、数度にわたってアンケートを、滞在している銘傳大学や、調査に協力してくれる大学において調査をするつもりであった。そして、その調査結果を講義などにおいて、フィードバックする予定でいた。しかしビザの発給の遅れなどによって、出発が 6 月 17 日になり、台湾の学年暦でいう、年度替わりの夏休みにあたり、下記の研究活動のように計画を変更せざるを得なかった。

【研究活動】

夏休みのため教員への聞き取り調査も行えないので、研究課題の幅を広げて、自分一人で行える、日本の企業の漢字表記や、日本由来のものの漢字表記の調査を、テレビや街の散策をかねて行った。

9 月になり講義も始まったので、大学院生への聞き取りや、専任教員への聞き取り調査を行った。また、様々な学会に参加して、他大学の状況について情報を集めた。

2022 年 9 月 17 日　台湾大学　文学院　日本研究中心　大学院生向けシンポジウム

2022 年 10 月 15 日　国立政治大学　日本語文学系　国際研討会

2022 年 10 月 21～22 日　台湾大学　文学院　日本研究中心　「多様性与共通性的国際日本学」「地名から日本昔話語彙を考える」（林立萍氏）のコメンテーター

2022 年 11 月 14 日　世新大学　日本語文系　「日本学的伝承与創新」学術研討会

2022 年 11 月 19 日　2022 年度台湾日語教育学会　国際シンポジウム

『世界』に繋がるための日本語・日本文学　輔仁大学
2022 年 12 月 10 日　2022 年度台湾日本語文学会　国際シンポジウム
「SDCG s に向けた日本文学研究の展望」　東呉大学

それらの知見をもとに、銘傳大学や他大学において、アンケート調査を実施し、データ処理と分析を行った。

なお、授業においては、読みこと、話すことが中心であり、文字についても漢字圏の人にとって身近ではない平仮名・片仮名が中心である。漢字の新字体については、作文の講義の際に、少し注意する程度であった。

その他に、これまで日本で行ってきた研究成果について、下記の大学の大学院生を対象にして講義や、学生を対象に講演を行った。

（講義）2022 年 9 月 22 日　淡江大学
2022 年 10 月 3 日　東海大学
2022 年 11 月 22 日　24 日　台湾大学
（講演）2022 年 12 月 1 日　中国文化大学　ユーラシア講座
2023 年 3 月 17 日　銘傳大学　応日系　2022 年度国際学術研討会
「後疫情時代日語教学之創新与実践」

【研究成果】

アンケート調査の分析にとまどっており、アンケートの結果についての詳細はまだ公表できない。分析が終わり次第、順次発表していく予定でいる。その内容について下記の【教育への効果】の欄で触れる。

なお、夏休み以降行っている日本の企業名や日本由来のものの漢字表記については、3 月 14 日の銘傳大学大学院の講義において、発表を行った。

内容は次のようなものである。テレビなど視覚に訴えるものでは、ローマ字表記も用いる場合も多いが、親近感を持たせるために漢字表記を採用している企業もある。サントリー（三得利）、ニトリ（得利）、ロート（楽敦）。企業名の漢字表記には企業の姿勢が読み取れる。その一方で、ヤマハは山葉という訓表記であり、台湾人にとってはヤマハとは読めない。あくまでも創業精神を重視しているようである。またあまり一般の人と関係しない、三菱や住友もそのままの表記である。

日本由来の食べ物では、うどん（烏龍）であり、ウーロン茶（烏龍茶）と同じである。またおでんには黒輪という表記もあり、日本語のダ行がラ行となっている。これは、台湾人がダ行が苦手なこととも関係しているようである。

なお、銘傳大学の学術研討会での講演内容については、2023 年度中に活字化される予定である。

【今後の展望】

アンケートの結果については、整理がつき次第、口頭発表や論文化を目指していくつもりでいる。また、この調査結果については、アンケートに調査してくれた学生や、協力してくれた大学へのフィードバックが必要だと思っている。その大学での講義、あるいは台湾での日本語教育の学会での発表の機会を設ける必要がある。

今回は繁体字を使用している台湾での日本語学習者を対象とした調査研究であった。その実態をまとめることはとても重要なことである。しかし、最初に述べたように、明治大学には中国大陸からの留学生と韓国からの留学生が多い。簡体字を使用している中国の大陸での日本語教育の現場や学習者の日本の新字体学習の実態について、また韓国においての日本語教育の現場における漢字指導などについて調査を行い、それぞれの違いなどについても今後は研究していきたいと思っている。

【教育への効果】

台湾では、学生に限らず、多くの人が中国から通信販売での購入を行っており、簡体字にも慣れている。そこで、日本語の新字体学習において、簡体字との関わりも入れて指導していくのが適しているように思われる。

アンケート調査の結果をもとに判断していくと、次のような方法を採用することが望ましいと思われる。

日本語能力試験では級によって出題される漢字の範囲が示されている。級ごとの漢字において、台湾と繁体字と同じもの（すなわち、特に勉強の必要のないもの）、中国の簡体字と同じものを、まず示す。そして、注意すべきものとして簡体字と異なるものを挙げる。

研究課題である新字体と繁体字との異なるものについては、次のような点に注意しながら、分類をしていく必要がある。

・新字体と繁体字とがまったく異なるもの。
・新字体が繁体字の一部分を利用しているもの。
・新字体と繁体字とが微妙に異なるもの。

これらの点に注目し整理したものを、一目でわかる形にしたものを作成したものを、学習者や指導者に配布し、参考になるかどうか意見を広く求めて、さらに改良をしていきたいと思っている。